

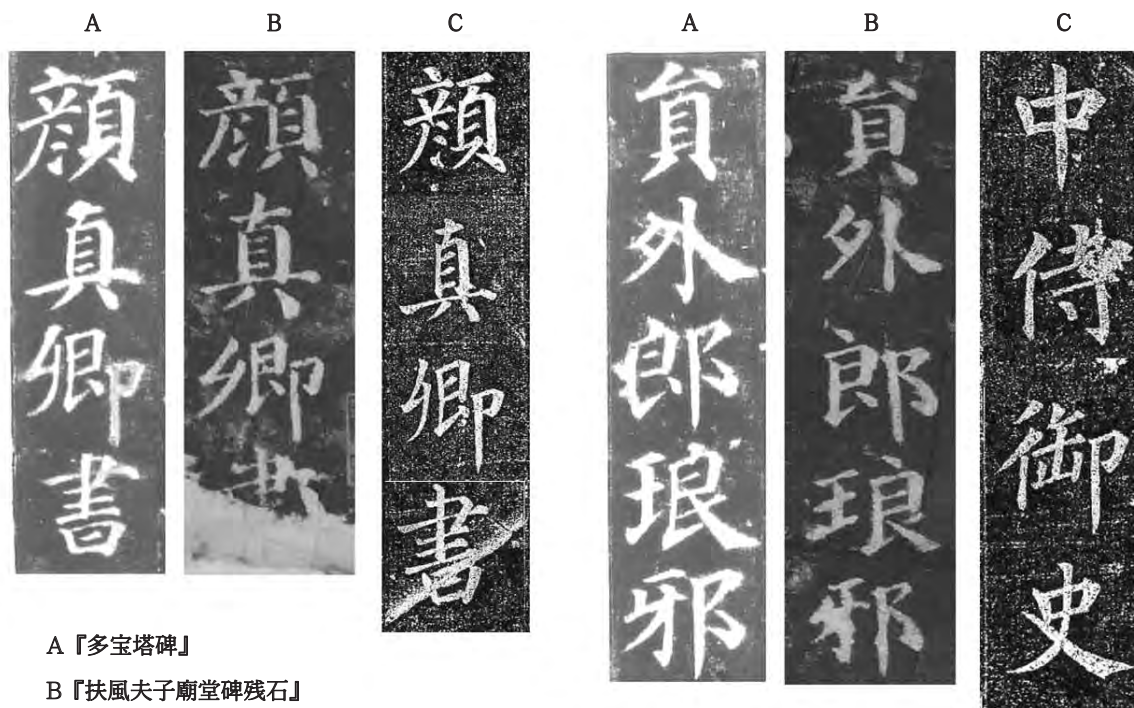
主図版①『扶風夫子廟堂碑殘石』

「顔真卿の書」①

扶風夫子廟堂碑残石

唐・天宝年間（742～756年頃）

三件の書風比較



A『多宝塔碑』

B『扶風夫子廟堂碑残石』

C『郭虚已墓誌』

新春から盛唐の偉大な書道家・顔真卿展が、東京国立博物館で開催される。これを機に顔真卿に関するやや珍しい書跡資料を数回に分けて紹介しよう。第一回目は、最も早年に属する「扶風夫子廟堂碑残石」である。これは小さな残石であるが、早年度の代表作とされる「多宝塔碑」(752・西安碑林博物館蔵)や一九九七年に発見された「郭虚已墓誌」(749・偃師商城博物館蔵)に書風や文字の大きさも近く、書かれた年代もほぼ同時代である。これら二件と比較して最も穏やかな趣を示している。「多宝塔碑」は、顔真卿の早年の四十代の書であり、まだ後年の「顔体」と称せられる独特の、字画の太い、どっしりとした楷書体ではない。横画はやや細く縦画が太く、唐代の写経体に近い。そのため古くから楷書の入門的な手本とされ、歴代に渡り学ばれてきた。「多宝塔碑」は江戸時代に多くの拓本が輸入され、多くの人々に学ばれてきた。この「扶風夫子廟堂碑」は早くに碑が壊れて、明時代に出土したと伝えられる残石が一件伝わるのみである。この残石の拓本は、これまで余り目にしたことがない。入手した展示目録にはこの拓本は、ないようである。図版に示した拓は、「八瓊室」の朱文印があり、「八瓊室金石補正」を著した清朝後期の金石家・陸增祥(1815～1882)の旧蔵本である。

伊藤滋(書齋名・木鷄室)

書道芸術院 平成の群像 (2019)



第70回記念書道芸術院展「吹」

上田和芳書



上田和芳

「継続は力なり」 ——不屈の精神で——

我が師、浜谷芳仙先生との出会いは40年近く前のことです。

中学生になった子どもの塾通いの付き添いをやめて、これからは私が習いたいという軽い気持ちで入会したのが切っ掛けでした。

ある時、院展に出品してみないかと勧められ、言われるままに書き上げた前衛書の作品が準特選に入賞しました。

当初は驚きましたが、表彰式に出席して受賞者の晴れやかな表情を目の当たりにして、初めて受賞の喜びが湧いてきた事を今も忘れられません。

いつも書の基本は、「骨格豊かな書線」であるとの厳しい指導を受けて精進してきました。

第57回・59回書道芸術院展で、栄えある白雪紅梅賞を受賞し、先生の熱意と指導力に敬服しました。お陰様で前衛書部の審査

会員の仲間入りが出来て大きな励みとなりました。

学書の基本は「古典で学べ」であり、殊に前衛書は大胆さと豪快さが要で、それによって線美や墨美が爽快に表現されるものだと思われました。

私の書の人生はスローアンドスローですが、今やっと開眼し、ハードルをひとつ通り抜けたように思われ、更なる課題に向かつて挑戦しています。

さて、富山には300メートルの高さを誇る立山連峰が聳え、そこから流れる河川も数多く、自然の災害もこれまた多い県です。

平成30年1月から2月の豪雪により、交通機関や物流が混乱して、日常生活が脅かされました。しかし、県民はその自然の力をプラス思考にして力強く生きております。

掲載作品の「吹」は、第70回記念書道芸術院展の出品作です。「嵐も吹けば風も吹く、人の道は尚も厳しい」。その思いの心象表現であり、言葉の形象が要です。

制作で反省していることは、言葉の形象に甘さがあり、また未熟のために願いが果たせず、その悔しさを次の作品に生かせるよう努力しております。

頌

春

謹賀新年
己亥新春を寿ぐ

2019 平成31年の新しき年を迎え、皆様のご多幸をお祈りします。

ご承知の通り、平成最後の正月となり、5月からは新しい元号での1年となります。「いのしし」歳は「猪突猛進」など勢いのいいイメージもありますが、勢いばかりでは世の中うまく進んでいきません。世情は相変わらず落ち着かない、不安な様相を見せております。せめて我が書道芸術の世界は、心を癒し豊かな心情を培ってくださることを祈りたいと思います。

本年72回目を迎える書道芸術院展は、昨年暮れの一般公募、無鑑査作品の鑑別審査を終え、1月末の審候、審査会員対象の特別賞選考を経て、2月6日から11日まで、東京都美術館で開催します。2月10日の表彰式、祝賀会、都合3回開催予定の作品解説会など、多彩に展開します。多数の方々のご高覧を期待します。

本年も8月下旬、群馬県伊香保温泉での単位認定講習会、10月の秋季展、併催の「書道芸術院の書かな・篆刻刻字・前衛書」展、オーストリア・ウィーン市での国際交流書道展、創立記念日講演会など、着実に一步一步前進、展開してまいります。

皆様方の一層のご支援、ご協力を切にお願いし、新年のご挨拶とします。

平成31年元旦

公益財団法人書道芸術院理事長

辻元大雲
役員一同

書のひろば

理事長 辻元大雲

明けましておめでと〜ございませう。本年もよろしくお願ひいたします。

第72回書道芸術院展一般公募・無鑑査搬入、鑑別審査終わる

12月3日、第72回書道芸術院展一般公募・無鑑査の作品搬入が行われ、15・16日両日例年と同じ共和会館にて鑑別審査会が行われた。71回展より一般公募が26点減となったが、無鑑査は同数のご出品をいただき、ほっと一安心で鑑別審査に臨んだ。

一般公募・無鑑査担当の当番審査員、各部審査事務委員、審査部・総務部など合わせて総勢160名余が2日間にわたり慎重かつ公平、温情も交えつつ審査を行った。ほぼ一日で事務作業まで完了する「かな部」「篆刻刻字部」「前衛書部」、審査は一日で終了するものの、事務作業は二日目に亘る。「漢字部」「現代詩文書部」と出品点数により差が出るが担当された審査員のご努力に深く感謝申し上げたい。

また審査部、総務部担当には事前の搬入受付、諸準備含めここまで延べ10日間以上のご苦勞をいただいている。今後來年の役員作品書類搬入（1月18日）、作品搬入（1月27日）、特別賞選考（1月28・29日）と続き、2月5日陳列、6日から11日までの東京都美術

館会期、10日には学生展・一般展表彰式、祝賀会を帝国ホテルにて展開していく予定である。

* 作品解説会を3回開催

作品解説会は昨年と同じく3回開催予定。初日6日14時から「一般公募・無鑑査」上位入賞作品を対象として各部審査主任の進行で行う。

9日14時から秋季展併催の「書道芸術院の書 漢字」展出品者17名の作品を中心とした作品研究会を開催する。

あらかじめ17名の作家から作品に対する想いや反省などをまとめた資料も作成して、深く突っ込んだ意見交換なども想定している。漢字部に限らず多くの方々の参加を期待する。

更に11日最終日12時からはこれまでと同じく第1室幹部役員作品、大作などを中心にした作品解説会を行う。

第72回書道芸術院展搬入状況

部門	一般公募	前回展	無鑑査	前回展
漢字部	204	228	299	309
かな部	90	93	75	77
現代詩文書部	187	182	276	265
篆刻・刻字部	15	16	25	27
前衛書部	112	115	151	148
合計	608	634	826	826
増減	-26		0	

毎日書道会理事會開催 参与會員に飯高和子氏推薦さる

12月5日一般財団法人毎日書道会の定例理事會が開催され、主に来年度の事業計画、予算案の審議、第71回毎日書道展の主要人事が決定した。

- ・第71回展実行委員長 中原志軒
- ・総務部長 大谷洋峻
- ・審査部長 柳 碧華
- ・陳列部長 山中翠谷
- ・運営委員 漢字部 種谷萬城
- 近代詩文書部 坂本素雪
- 大字書部 小林琴水
- 前衛書部 金井如水
- ・東北仙台展実行委員長 坂本素雪
- ・関西展実行委員長 小林琴水
- ・昇格人事
- 参与會員 飯高和子
- 審査會員 岩垣若翠(漢字)、九條純代(かな)、柳橋香仙(前衛)

- 會員 小川白柳、竹浪叙舟(漢字)、利村郁子、中川紅蘭、藤原三枝子、松本泰泉(かな)、桐岡銘紀、佐藤華炎、佐藤光耀、千田春月(近詩)、赤羽蘭徑(刻字)、岩上郁子、小此木白洋(前衛)
- ・会友(略)

高野山書道協合理事會 (役員改選)

12月9日、高野山書道協定会定例理事會が開催され、3年間の任期満了による役員改選、第54回展開催要項など役員改選 副会長4名(石飛博光・鬼頭墨峻・辻元大雲・船本芳雲)は

留任。(以下院関係者 太字は新)
 ・参与 香川倫子、小伏竹村 大野祥雲 嵯峨大拙 飯高和子、小伏小扇 砂本杏花

・常任理事 下谷洋子、種谷萬城
 ・理事 小竹石雲 小林琴水 千葉蒼玄 稲垣小燕(再)、前田龍雲
 ・監事 太田蓮紅

・第54回大会審査委員長 石飛博光
 ・大会運営委員 下谷洋子、種谷萬城
 ・当番審査員 辻元大雲、下谷洋子 稲垣小燕

・作品締切 2019年5月15日
 ・院関係団体の出品協力を是非お願いしたい。出品要項などは来年3月ごろに配布予定。

2019新春は書で花盛り

- ・現代書道20人展 1月2日〜7日 日本橋高島屋
- ・本院から下谷洋子常務理事が出品
- ・2019現代の書新春展 1月3日〜9日
- 和光会場 辻元大雲、下谷洋子出品
- セントラル会場 大隅晃弘、尾形澄神、工藤永翠、千葉蒼玄(65歳以下) 席上揮毫 7日 大隅晃弘
- ・毎日チャリティー書展 1月4日〜9日 銀座面廊美術館
- 院関係 辻元大雲、下谷洋子ほか70回毎日書道展運営委員、当番審査員など役員出品。32,400円〜600円。

漢字 (四)

飯田 春香

前衛書 (四)

嵯峨 大拙

墨色について

次なる課題は墨についてですが、これがまた大変難しい事です。墨は濃淡、潤濁、墨色で変化の妙を引き出します。濃墨は白黒の対照で字がくっきりと浮き上がり力強さを発揮しますが、淡墨は穏やかであり滲みにより作品を引き立ててくれます。大字書を書く場合淡墨を使うことが多いですが、その墨作りがまた難しく苦勞をします。紙との相性、気温湿度の関係で滲み、色合いが微妙に変わります。墨作りが成功すれば作品が半分は出来たようなもので、書いていて楽しくなりますが、そうで

ない時は書く意欲がなくなります。

今は滲みを助けてくれる墨液があり随分と助かっています。また、墨量により豊かさを表現したり、かすれの美しさを出したり、一字の中に色々な表現を入れることができます。その兼ね合いがうまくできれば一人前？

この「露」は、峰雲賞受賞作です。墨色も滲みも成功した作品だと思っています。



第65回記念書道芸術院展 「露」

飯田春香書

21世紀の書

— 私の主張 —

平成25年2月、糸とんぼの制作過程。未曾有の大津波（平成23年3月11日午後2時46分）、我が家は全壊し石巻の男子高校に避難、そこで偶然知り合いの人に出合い、「よかったら我が家に来たら」と声をかけられ、途中友だちの家に一泊し、次の日声をかけられた家にお世話になった。石巻にもどり何とかアパートをさがし毎日自宅の片付けに通った。そして翌年の冬、京都に旅行に出かけた。その時に購入した扇からヒントを得て、第66回書道芸術院展に出品した（平成25年・題は「誕生」）。新しく生命をえた糸とんぼを黄色と少量の赤で、行の動きと微妙な余白の動きを表現した作品である。



第66回書道芸術院展 「誕生」

嵯峨大拙書

書道芸術院創立記念日 特別公開講演会

平成30年11月23日(金・祝)
於 上野精養軒

「顔真卿と唐時代の書」

— 祭姪文稿を中心に —

講師 富田 淳 先生

〈公開講演会〉

理事長 辻元大雲

本院創立記念日恒例の特別公開講演会が11月23日、上野精養軒にて開催され、講師は東京国立博物館学芸部部長の富田淳先生にご依頼し「顔真卿と唐時代の書―祭姪文稿を中心に―」と題して行われた。本年(2019)1月16日より開催される東博特別展「顔真卿―王羲之を超えた名筆―」に正にタイムミスを合わせた好企画となった。

当日午前中には通常理事会を顧問、評議員にオブザーバー参加していただき、72回書道芸術院展開催細目、関係人事、学生展審査結果などのほか、単位認定講習会(群馬)開催原案、ウィーン展報告などを審議した。

講演会は午後2時より1時間半の予定が2時間余りとオーバーしたが、会場満席の200名を超える参加者で充実盛況の講演会となった。富田先生自らパソコン操作、スライド映写を中心に、具体的かつ内容の濃い講演であった。また資料として特別に報道関係者用の内部資料を元に、重要なポイントを詳細、具体的に説明していただいた。

「眺めているだけで、ここが洗わ

れる 人間が深く生きるといふことはこのようなことかと 顔真卿は書で教えてくれる」(伊集院静氏)

本展に特別に寄せられたキャッチコピーを引き合いに、本展の魅力を端的に話されたのが印象的であった。

ここ近年に各地で開催された書に関する特別展は、2013年「書聖王羲之」(東博)、2016年「王羲之から空海へ」(大阪市美)、2018年「王羲之と日本の書」(九州国博)、そして今回の「顔真卿展」(東博)と続いており、書への関心が極めて高まっていることの証といえる。

王羲之と太宗皇帝の関係から顔真卿へと続く書の流れ、更に日本への影響などの変遷を理解する必要、根源に関わることに関心を向けることの重要性を強く訴えられた。更に本展の6章からなる展示構成、展覧会の見どころ、

- ①楷書の美しさ 徹底解析
- ②祭姪文稿の魅力に迫る
- ③王羲之神話の崩壊をたどる

詳細の内容は省略せざるを得ないが、実に中身の濃いご講演をいただき、参加者の眼から鱗が何枚もはがれる、素晴らしい充実した講演であった。

講演会終了後は会場を移して、院創立記念の祝賀懇親会が、富田先生を囲んで賑やかに開催された。以下の報告は別記を参照いただきたい。



真剣に聞き入る大勢の参加者



講師の富田先生

〈懇親会〉

片岡豪峰

創立記念日の行事として、理事会・公開講演会に続いて、多くの会員が参加して懇親会が行われました。会には講演から引き続き富田淳先生、毎日書道会専務理事西村修一先生、書道芸術誌に執筆いただいている伊藤滋先生の3名の皆様にご来賓として参加をいただきました。

懇親会は辻元大雲理事長の挨拶で始まり、今回の講師富田淳先生、来賓を代表して西村専務理事にご挨拶をいただきました。次に本院顧問の小伏竹村先生の乾杯でとても和やかな雰囲気の中で会が始まりました。全国各地から会員が集う数少ない機会のため会場のおちろこちらで話の輪が広がっていました。

当日参加されている総局支局長の先生方からはこの1年のそれぞれの総局支局報告として活動報告、これからの行事予定、展覧会案内等が紹介されました。また、各地で表彰された先生方の披露もありました。

関西総局から恩地春洋先生の遺墨展の報告、四国支局から今夏の単位認定講習会の報告と北関東総局から来年8

月24日・25日に群馬県伊香保で行われる単位認定講習会のお知らせなどがありました。

続いてこれからの院関係者の展覧会を辻元先生から下谷先生が出品される「現代書道 二十人展（1/2）」の紹介を皮切りに下谷先生に音頭をとっていただき出品者が壇上に登壇し、「現代の書新春展（1/3）」「現代女流書100人展（4/3）」などの展覧会が紹介されました。

遠方よりの会員の方々も数多くいらっしゃいましたので、短い時間でしたがとても充実した楽しい会が無事終了しました。



辻元理事長あいさつ



小伏竹村顧問乾杯の音頭



富田淳先生を囲んで



展覧会の紹介



大勢の会員でにぎわう懇親会

草書千字文 唐 懷素 ①

漢字研究部臨書課題

Ⅱ(半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

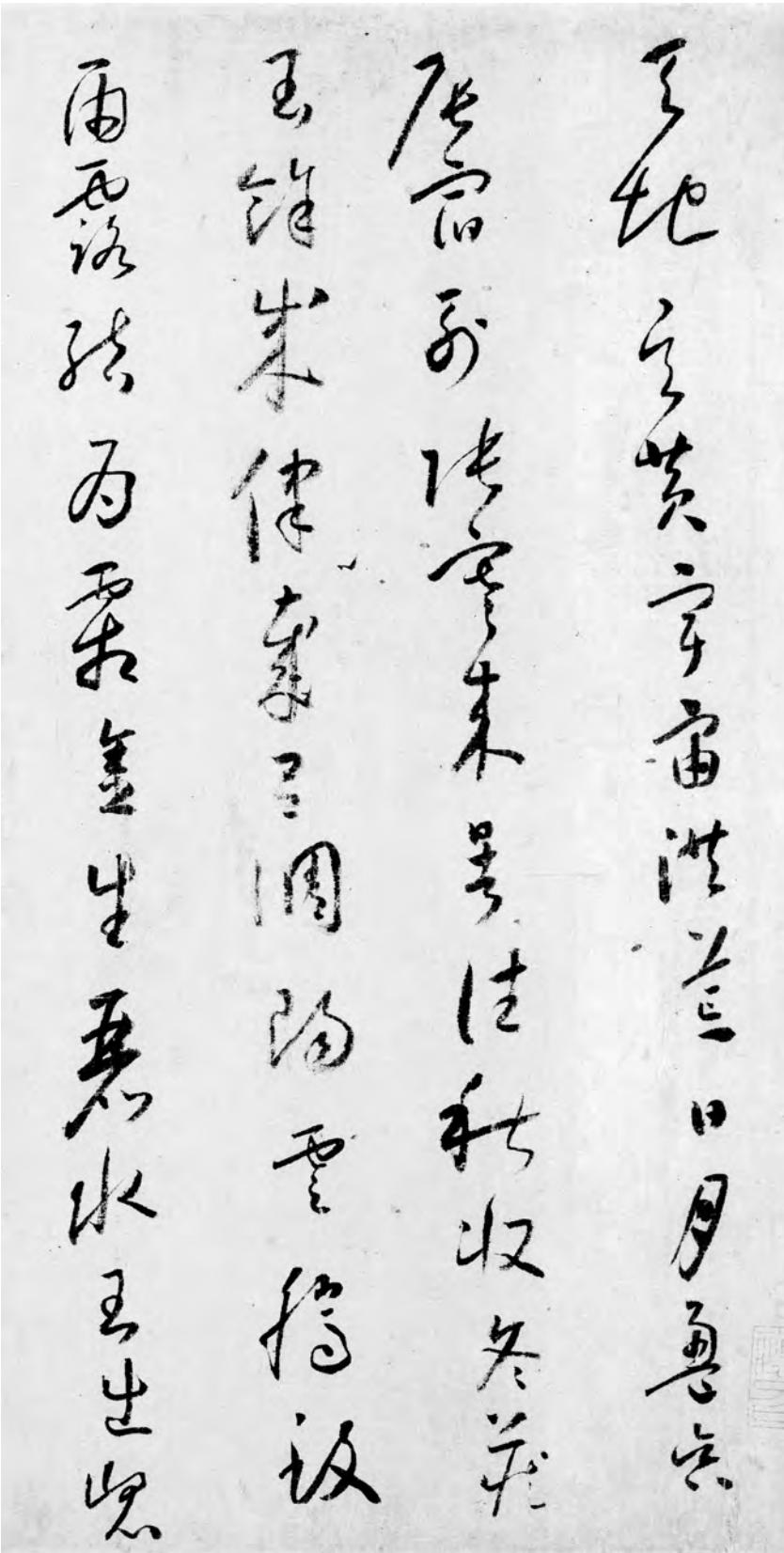
特別研究部臨書課題

Ⅱ(毎日展公募サイズ以内・縦横自由)

当該古典の左記掲載部分以外も可。

〔解説〕千字文は、中国、南朝・梁(502~549)の周興嗣が武帝の命により、王羲之の筆跡を集め、文字習得のための教材として編んだもの。一字の重複もない一千字の韻文。四字一句、「天地玄黄」から「焉哉乎也」までの250句から成る。天文・地理・政治・経済・社会・歴史・倫理など森羅万象について述べている。多くの書家によっ

て筆写されているが、智永の真草千字文とこの懷素の草書千字文が名高い。草書の名手といわれる懷素の草書千字文は、懷素63歳の書で、小字でありながら運筆にゆとりがあり、淡白な中に深い趣が感じられる。古来一字一金の価値があると
いう意から、千金帖の名で知られている。(編集部)



(掲載図版76%に縮小)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

天地玄黄。宇宙洪荒。日月盈昃。辰宿列张。寒來暑往。秋收冬藏。玉餘成律。歲呂調陽。雲騰致雨。露結爲霜。金生麗水。玉出崑

古筆鑑賞

178

高野切第二種

(伝紀貫之)

①

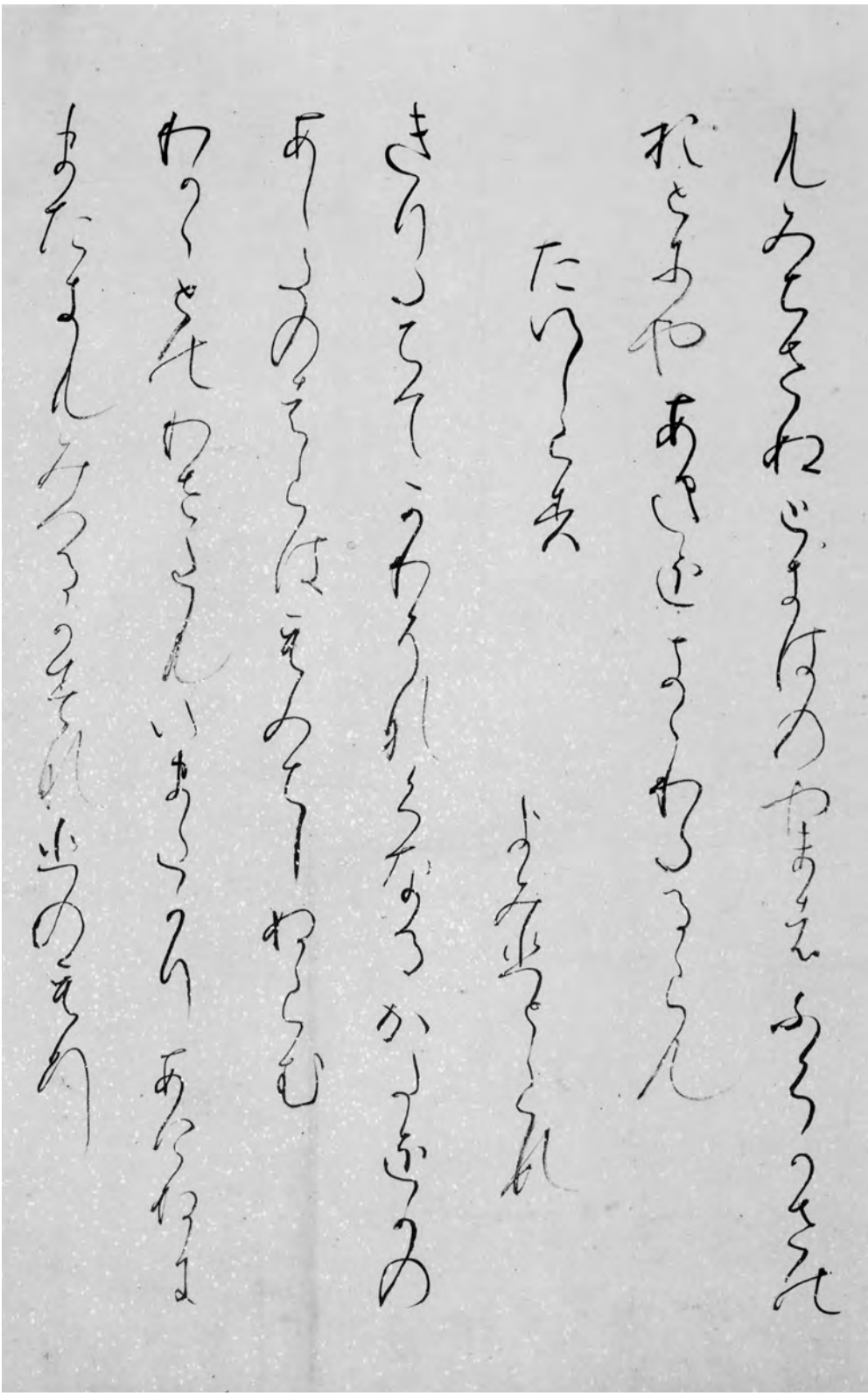
〈よみ〉

もみぢせぬときはのやまはふくかぜの
おとにやあきをききわたるらん
だいしらず よみびとしらず
きりたちてかりぞなくなるかたをかの
あしたのはらはもみぢしぬらむ
わがかのわせたもいまだかりあげぬに
まだきもみつるかみなびのもり

〔解説〕「古今和歌集」の現存最古の写本である「高野切」は、11世紀半ば、三人の能書が全二十巻を分担して書写（寄合書）したと推定され、その書風の違いから、第一種・第二種・第三種と区別して呼ばれている。第二種は巻第一・第三の断簡と完本の巻第五・第八が伝存する。「高野切」の三種類の中で、この第二種は、最も個性的な書風を示している。紙にくい込むような筆力で、特に側筆気味に運んだ斜めの線が印象的である。

※古筆は原寸(以上も可)で臨書(まじょう)。

(編集部)



※掲載図版は80%に縮小。

(個人蔵)

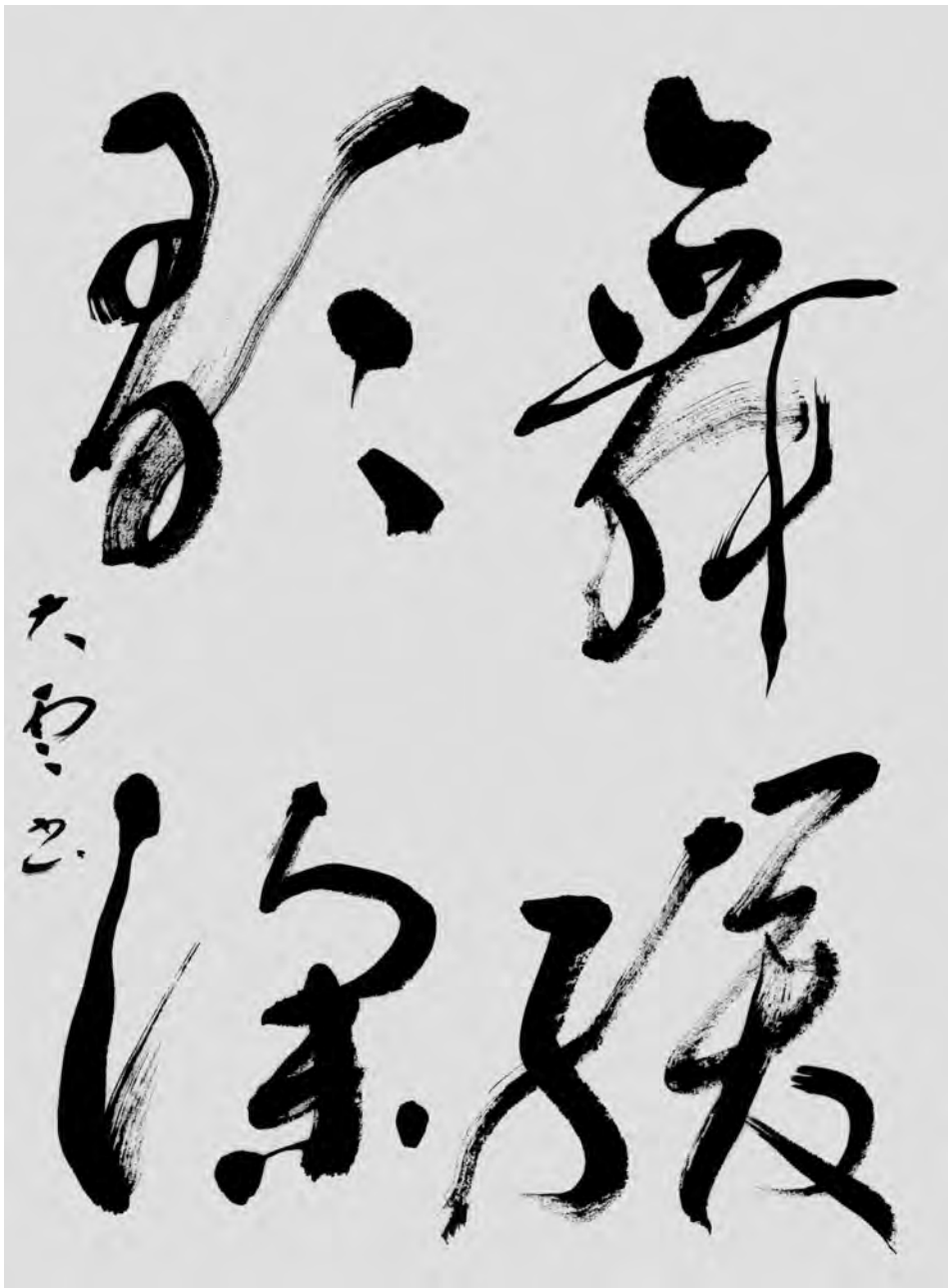
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

かな研究部
臨書課題 (半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
別紙を裁断して貼付も可。半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部
臨書課題 (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)
上記の掲載以外も可。

漢字規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書



舞緩歌深

よみ (舞緩やかに歌深し)

書体||自由

習い方解説 (四)

辻元大雲

舞緩歌深

(舞緩やかに歌深し)

舞は緩やかだが、歌はたけなわ、めでたさの形容です。軽快なリズムの草書表現です。筆はやや細めの羊毫長鋒を使用しています。

前回の続き。書として表現する場合の文字使用は特に活字体に気を付けなければいけません。筆写体と活字体は大きく異なる場合があります。古典臨書などで様々な文字造形の変化、バラエティに富む表現力を身に着けて、その場その場にに応じて書き分けができる素養が物を言います。前回申し上げた書写体や旧字体での作品表現の場合、統一して表現することが大事です。新字体と旧字体を混在させないようにしましょう。更に現代詩文書の場合の新仮名遣いと旧仮名遣いも同様に統一させます。文字使用には気を付けましょう。

漢字規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

広瀬舟雲 選書



一步千金

よみ (一步千金)

書体 楷書

習い方解説 (四)

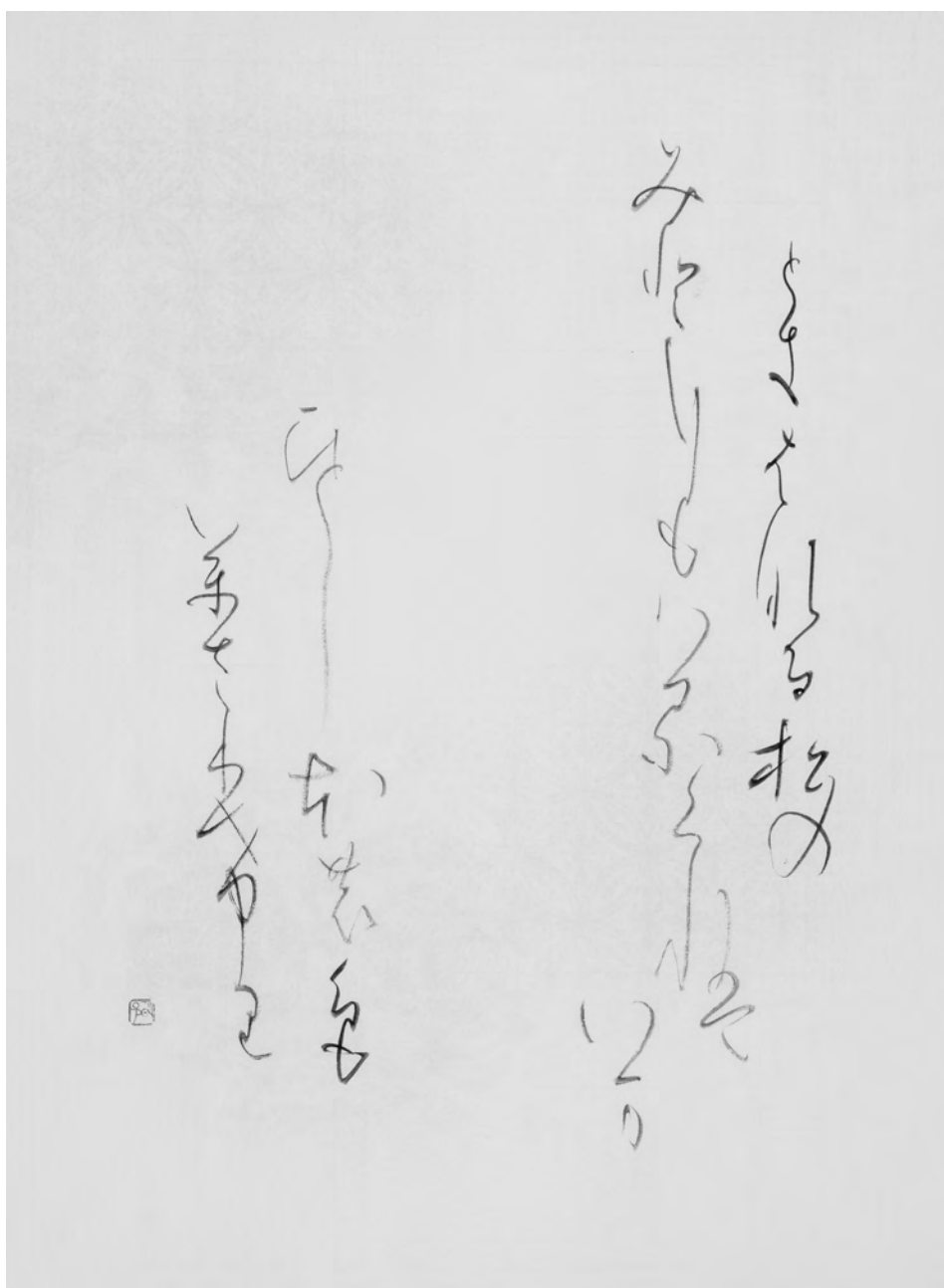
広瀬舟雲

一步千金 (将棋の格言)
(一步千金)

将棋といえば羽生永世七冠がとて有名ですが、連勝記録を塗り替えた若きプロ棋士・藤井君の誕生によって、さらに将棋ブームが高まったといえます。「一步千金」は、将棋の格言で、将棋の駒の「歩」のように一番低いものでも、(用い方次第で)時には千倍の価値があるものとなりえる。という意味のことです。

楮逐良の書のように、太細をつけ繊細で変化のある線で書いてみました。「歩」字は、「雁塔聖教序」中の異体字を用いました。「歩」の異体字「歩」の筆順は、真ん中の長い縦画は3画目に書きます。プロ棋士の多くは、それぞれお気に入りのお墨書した扇子を持って対局に臨みます。

かな規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可) 石井明子 選書



習い方解説 (一)

石井明子

常磐なる松の緑も春来れば

いまひとしほの色まさりけり

(源 宗于・古今和歌集)

一年中、色を変えないはずの松の緑も、春になると、一段と濃さを増したのだ、との意。

作品作りはどの分野も本質的には同じことと思いますが、かな作品制作について、私が平素、心がけるのは、バランスよく、美しいものに仕上げたいということです。そのために、字粒の大小、墨色の穏やかさ、墨量の過多でないこと等を考えます。

誤字は論外なので、座右に字典を置き、知っているつもりのもも確かめながら制作しましょう。用字は字典には載っていても、一般にあまり使われない字は避けましょう。多くの書展を見て学ぶことが大切で、目を高くします。

奇を衒うことは品性を失うものになるので慎みたいことです。

よみ方

常磐(と支者)な(那)る松の緑(み登り)も春(八累)来(久)れば(盤)

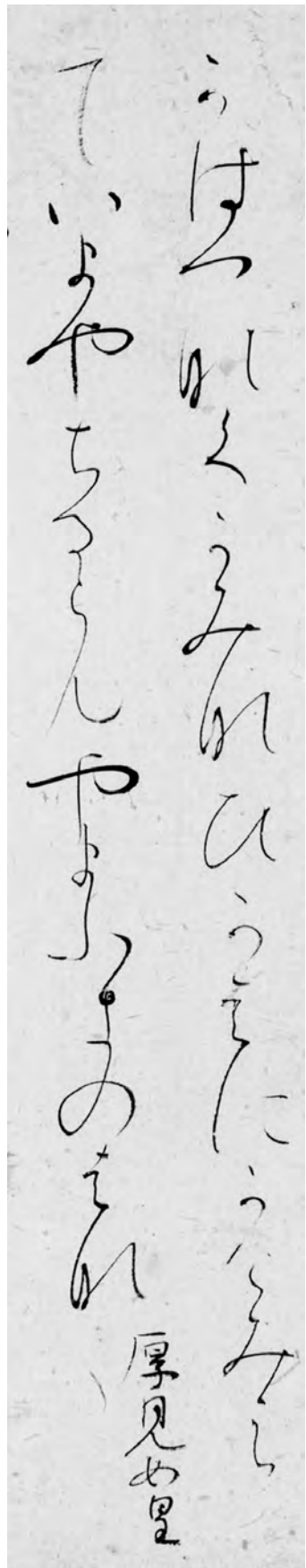
いま(万)ひとしほ(本)の(農)色ま(萬)さり(利)け(希)り(里)

創作

かな規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連続）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大123%）



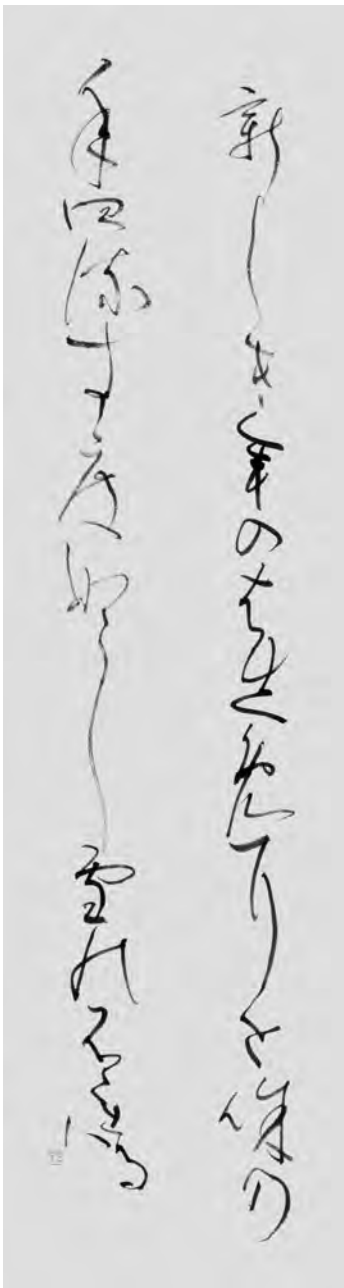
よみ方 か(可)は(づ)な(那)く(久)か(可)みな(那)びか(可)は(者)にか(可)げ(介)みえ

ていまやちるらんやまぶき(支)のは(者)な(那) 厚見女皇

習い方解説 (一)

松村くに子

かな条幅規定 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切（料紙可） 松村くに子 選書



よみ方 新しき年のは(者)じ(志)め(免)に(耳)豊(と)餘(の)元(元)年

し(四)る(流)す(と)度(度)な(那)らし(雪)の(能)降(不)れ(連)る(は)八

創作

「新年早々、今年は豊作だとい
うことの前触れであろう、雪がこ
んなに降ったのは」という意。
半切に一首を書く時、墨継ぎは
1回が一般的です。今回初めを漢
字にしたため墨量を少なめにし、
2回の墨継ぎにしました。筆に含
ませる墨量を工夫して書いてみま
しょう。特に加工紙は変化が出に
くいで調節が必要です。

*タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 〔二月十五日締めきり〕 用紙 小画仙紙半切

小林琴水選書



今年花落顏色改 明年花開復誰在
(今年花落ちて顏色改まり 明年花開くも復た誰れか 在る)

書体 自由

習い方解説 (四)

小林 琴水

小さく入って、大きな動きで、うねっていくように、流れていきます。「色」で思い切って紙の外に向かって払います。1行目の行尾の「年」を思い切って大きく、2行目の「花」「開」は軽く、書きました。「花」「開」は軽く、終わり、3文字はしつとりと落ちつくように書きましょう。

※タテ形式に限る

習い方解説 (四)

千葉 蒼玄

「まだ世に知られていない大人物と有能な若者のたとえ」

三国志の中に出てくる諸葛孔明と龐統を指した有名な言葉ですが、この意味のように、新しい年に大志を抱いて事に向かいたいものです。今回は「李嶠詩」の切れの良しい側筆の線を題材としてみました。笹の葉のように中央が太く、入筆、終筆が立ちあがる線が表現できれぱと思います。



漢字条幅規定 秀級以下 〔二月十五日締めきり〕 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

書体 自由

伏龍鳳雛
(伏龍鳳雛)



今は二月 たったそれだけ
あたりにはもう春がきこえてゐる
だけれども たったそれだけ
昔むかしの約束はもうのこらない
立原道造「浅き春に寄せて(抄)」雪枝書

用紙Ⅱはがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (四)

見越雪枝

今回は字配りよく書くために「字間の取り方」についてお話します。

文字と文字の間は、文字によって、あるいは用紙と字数の関係によっても違いは生じます。行間より字間をやや狭く詰めた方が読みやすくなります。

今回は、1・3行目に比べ、2・4・5行目(落款)が特に文字数が多く、楷書で書いたために字間の取り方に注意を払いました。字間の配置もさることながら、文字の大小も考慮しました。

また、行書で仕上げる場合、ひらがなを連綿すると余白に広狭が生じるため、雰囲気も変わり、読みやすく流れのある作品になります。

字間の取り方、文字の大小も考えて書きましょう。

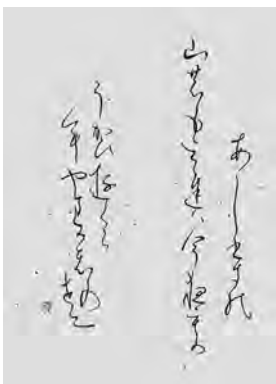
※落款(自分の名前)を必ず入れる。

木一作品 各部総評

NO. 691

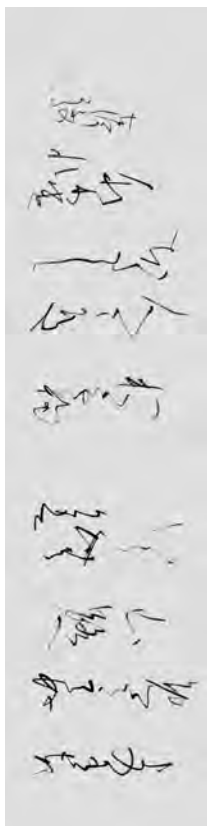
かな部 師範 山口 雪翠

気負いなく終始した筆致から生まれた作品は見る者に優しい。手習いの究極辿り着きたい所である。
◎かな部総評 誤字も少なく手本はよく学習されていた。未だテキストから半紙への拡大に問題ある人が散見。字粒を考慮。(明子評)



かな条幅部 師範 綿貫 智子

小気味良い運筆に巧みな潤濁が生きて、疎密の変化もうまく出せている。落款のまとめ方も秀逸。
◎かな条幅部総評 字粒の極端な大小により、全体の流れが不自然な作品が多かった。連綿線も大切にしたい。(瑞舟評)



現代詩文書部 特選 工藤 山房

墨色、線質、構成とも見事。特に線の強さは空間を切り裂くような筆致で「白」が眩しく美しい。
◎現代詩文書部総評 墨が紙の中へ入らず表面を走り、濁筆が煩く安定した作品過少。(素雪評)



漢字条幅部 師範 神保 清風

ゆったりとしたリズムで運筆、淑やかで品性高い書。細かい部分まで心が込められ、心安らぐ作。



前衛書部 特選 寺島 洋子

重厚な線で、懐の広い味わい深い造形がすばらしい。余裕を感じて安定作。
◎前衛書部総評 書はリズムで巧みな運筆で、造形・線質に生かされた庄巻作を期待する。(仙岳評)



◎漢字条幅部総評 下級4文字は本文落款とも小振りの作が目立った。筆の選択も大事。上級鳥を鳥と書く誤り多見した。(萬城評)

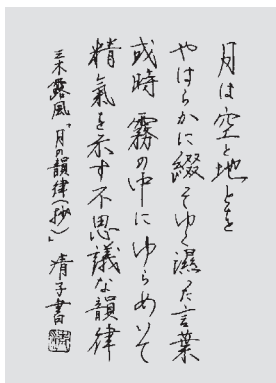
漢字部 師範 高木 昭華

たっぷりとした厚味ある線質が豊かな表情を醸し出し、味わい深い作。更なる向上を期待する。
◎漢字部総評 上級書体自由の課題ながら単調な表現多し。下級の楷書表現を含め、多様な取り組みを望む。(大雲評)



ペン字部 師範 富泉 清子

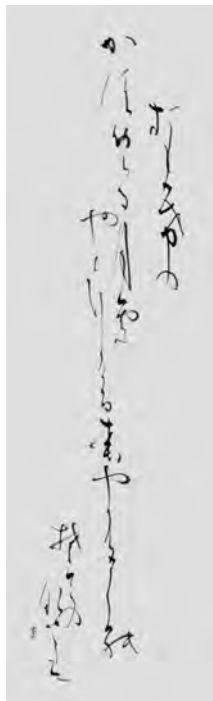
紙面の中で文字の大小、特に漢字とかなの調和が素晴らしい。大変読み易く練度の高い作品。
◎ペン字部総評 文字相互のバランスを考えた作が多く、表現豊かに仕上がった作品群でした。更なる研鑽を期待します!(雪枝評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 奥田瑞舟 三浦鄭街 倉林紅瑤



藤村昌子書

180×53cm

かな (AI) 藤村昌子 「面影の」

現代詩文書 (陽陽) 岩崎陽光 「高野公彦の歌」



岩崎陽光書

60×180cm

◆短歌一首をほのかな情感を漂わせつつ展開する。中央部を際立たせ、余白の広がり観者を魅了する。(大雲評)

◆まず、作品構成が素晴らしい。「起承転結」という言葉が思い浮かぶ作品。中央部の蟻、最後のいのちが印象的。(鄭街評)

◆中央の「転」部の盛り上がりから「結」部の表現の面白さ、落款の処理等手慣れた作風の成功とみる。(瑞舟評)

◆大胆な横構成で、前半のたっぷりとした余白と中央部の盛り上げが印象的。巧みな筆さばきから生まれる多彩な線質が魅力。(紅瑤評)

臨書 (千葉) 竹浪叙舟 「李嶠雜詠殘卷」



竹浪叙舟臨

177×55cm

◆3行構成で李嶠雜詠殘卷であるが、全体的に重い作品に感じられた。もっと緩急抑揚の変化を望む。(鄭街評)

◆原帖の強い筆致をよく観察し、3行構成に通貫したリズムを感じさせる。更に鋭い筆致が加われば。(大雲評)

◆李嶠の五言律詩一首を、2×6尺に3行構成の臨書作。おおらかな筆致の中に細く鋭い線もほしい。(紅瑤評)

◆丁寧で悠々と時々筆が返り、原本をよくとらえて表現されている。最後まで詰まりましたか。(瑞舟評)

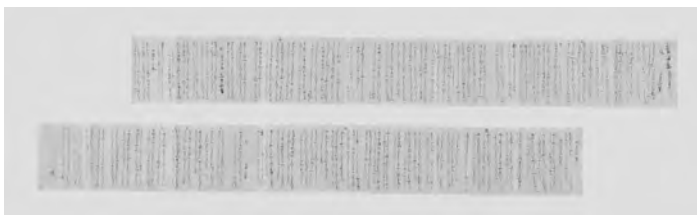
◆響きの高い線で細い線も強い。縦線の流れが爽快感を生んだ。構成もすっきりと収まった。(瑞舟評)

◆青竹色の料紙に切れ味鋭く書き流した作は、清涼感を伴いかな表現ならではの境地に誘ってくれる。(大雲評)

◆すっきり爽やかな運筆のリズム、余白のきいた安定感のある作品になった。料紙も美しく心洗われる作。(鄭街評)

◆細く歯切れのよい線条が心地よい。構成も巧み。美しい料紙と相まって余白が爽やかさを生み、格調高い作となった。(紅瑤評)

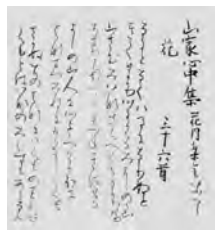
臨書 (清月) 境野和子「山家心中抄」



境野和子臨

53×180cm

部分拡大



◆ 気負いもなく淡々と自然の表現に着目。前半リズムに乗り、筆先も利いて切れ味鋭い意欲作。
(瑞舟評)

◆ 原帖の細やかなリズムと冴えある線質をよく観察している。特に本文書き出しからの数行がよい。
(大雲評)

◆ 原寸大で、上下2段に忠実かつ丁寧な臨書作。紙面が明るく爽やか。さらに、線の鋭さと墨量の変化がほしい。
(紅瑤評)

◆ 古筆の特徴をよく理解し最後まで丁寧に集中しまとめた。特に潤濁の変化は見事で高い技術を感じた。
(鄭街評)



172×53cm

漢字 (八街) 熊谷桃華「王維の詩」

熊谷桃華書

◆ 濃厚で躍動感が目を引く。筆圧の変化による深味のある線が魅力的。
(瑞舟評)

◆ 濃厚な線質で、ぐいぐい書き進めて行く気迫の書。気脈の一貫が素晴らしい作。墨色やや甘い。
(大雲評)

◆ 気字大きく大胆な運筆が冴え、その迫力に圧倒される。行頭がやや重い。さらに潤濁の変化がほしい。
(紅瑤評)

◆ 12字句を2行に大胆に書いたのが功を奏した。破筆が効果的で文字のデフォルメも良い。更なる飛躍を。
(鄭街評)

◆ 濃墨を用い、呼吸の長いシャープな線で上手くまとめた。特に飛沫が美しく爽快な明るい作品である。
(鄭街評)

◆ 墨溜りの密から、筆を開いて一気に下方へ引いた大胆な線と当たりの鋭さが魅力的。
(瑞舟評)

◆ 上部から下部へ冴えある潤濁の変化から生まれるリズム・流れが魅力的。何より渴筆が美しく、明るく爽やかな快作。
(紅瑤評)

◆ スピード感溢れる運筆のリズムが紙面に動きを与え、冴えた表情を見せる作。下部やや散漫か。
(大雲評)



相内沙莉書

140×60cm

前衛書

(白珠)

相内沙莉「熱気」

創作の部(37点)

漢字 3点

かな 3点

現代 16点

篆刻 0点

前衛 15点

臨書の部(25点)

漢字 22点

かな 3点

総出品点数

62点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

秀恵 阿部 雅悠

「かな」

玉松 田中 耶衣

〔現代詩〕

寿福 大作 優子

玄穹 千葉 紅雪

もく 西川 藤象

〔前衛〕

蓮紅 大友 紅蓉

玄象 大鹿 洋江

篤信 三浦 朱鳳

松風 西條 松雲

〔臨書の部〕

〔漢字〕

紅瑤 金井みどり

八街 鶴沢 明美

大雲 宮原 香扇

翠苑 氏家 久光

華祥 加藤 雅芳

「かな」

千葉 猪又 理扇

漢字研究部
(李嶠雜詠殘卷)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品

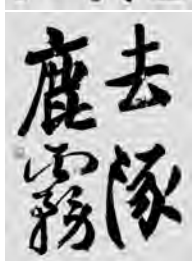
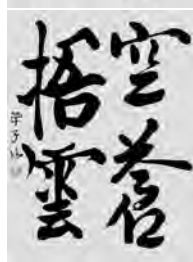
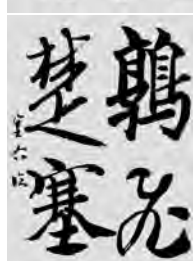
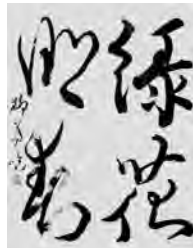
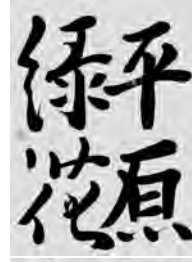
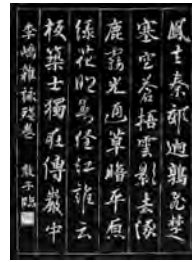


加藤 雅芳

漢字研究部 特選 加藤 雅芳
今回の課題の「李嶠雜詠殘卷」は肥瘦、緩急の変化に富んだ線で書かれた品格ある書です。このような特徴を良く捉え研究された見事な臨書です。特に筆力ある線と、用筆の巧みさに感心しました。

◎漢字研究部総評
今回寄せられた作品は、全般的に伸びやかに、リズムカルな表現の作品が多く、楽しく

拝見させていただきました。ただし、筆法の理解度の低い作品の少なからず見受けられたのは残念です。特に「鳳」や「雲」の字の右上の転折を筆を離して書いた作品や、同じく右側の転折に、後から点を打つたものと見受けられる作品もありました。基本の用筆をもう一度研究されることを望みます。



千四美歩智眞
代子峰艸佳景華

白米隆藤篁柳
雅子仙瓊右芳

紅谷静浩紀 ふみ
雨秀子子夫子

美裕叙真光敦
穗子孝弓霞子

〔特別昇級試験臨書課題〕

※下記の写真掲載部分の中から規定の文字数を臨書する。掲載以外は違反となります。

孔子廟堂碑 (楷書)

漢字部

第一種

半紙に写真掲載の中から4文字を臨書



知_レ幾 其神惟睿作_レ聖 / 玄妙之境。希夷不_レ測。

蘇慈墓誌銘 (楷書)

漢字部

第二種

半紙に写真掲載の中から4文字を臨書



九曲靈長。河流出_二積石_一 / 之_二下_一。十城側厚。玉英産_二 / 崑崙_一之上。故地稱_二陸海_一

大のちをいし

あまのひよりわづれてなごころ

けこまぬうらこころをいしつゝわづ

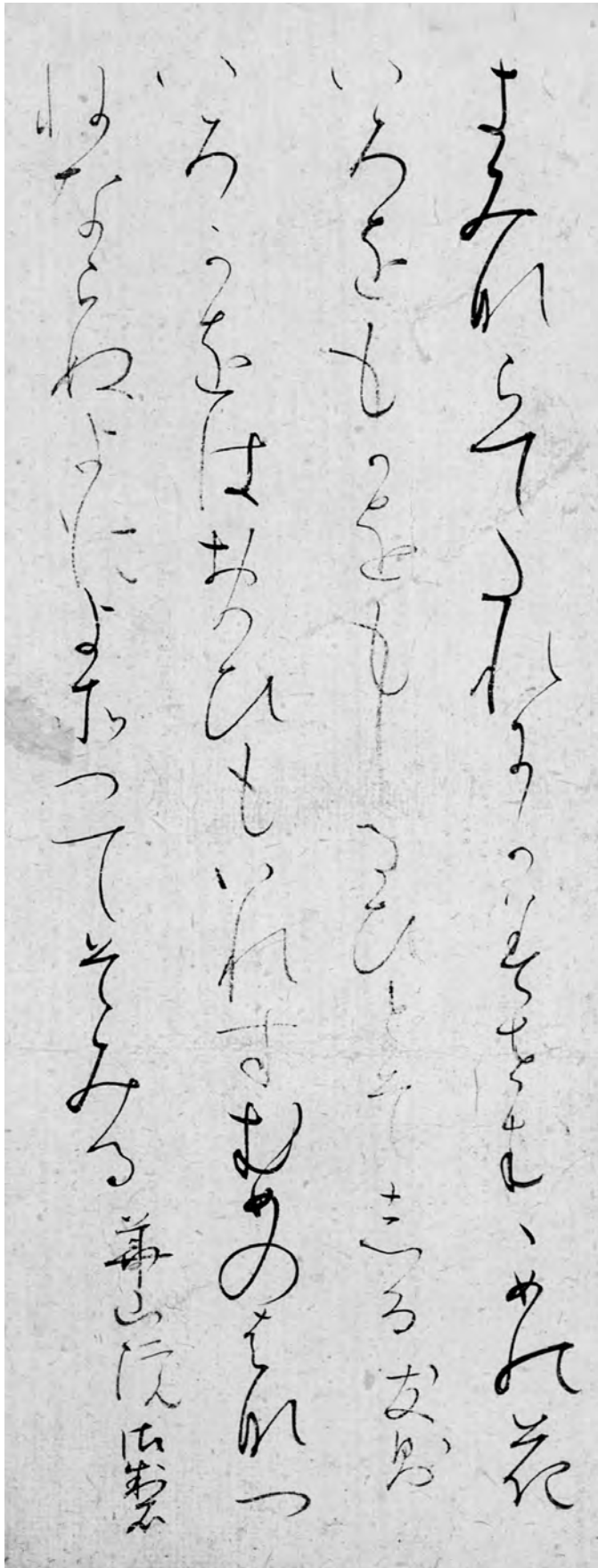
ふちけのちをいし

あまのちをいし

あまのちをいし

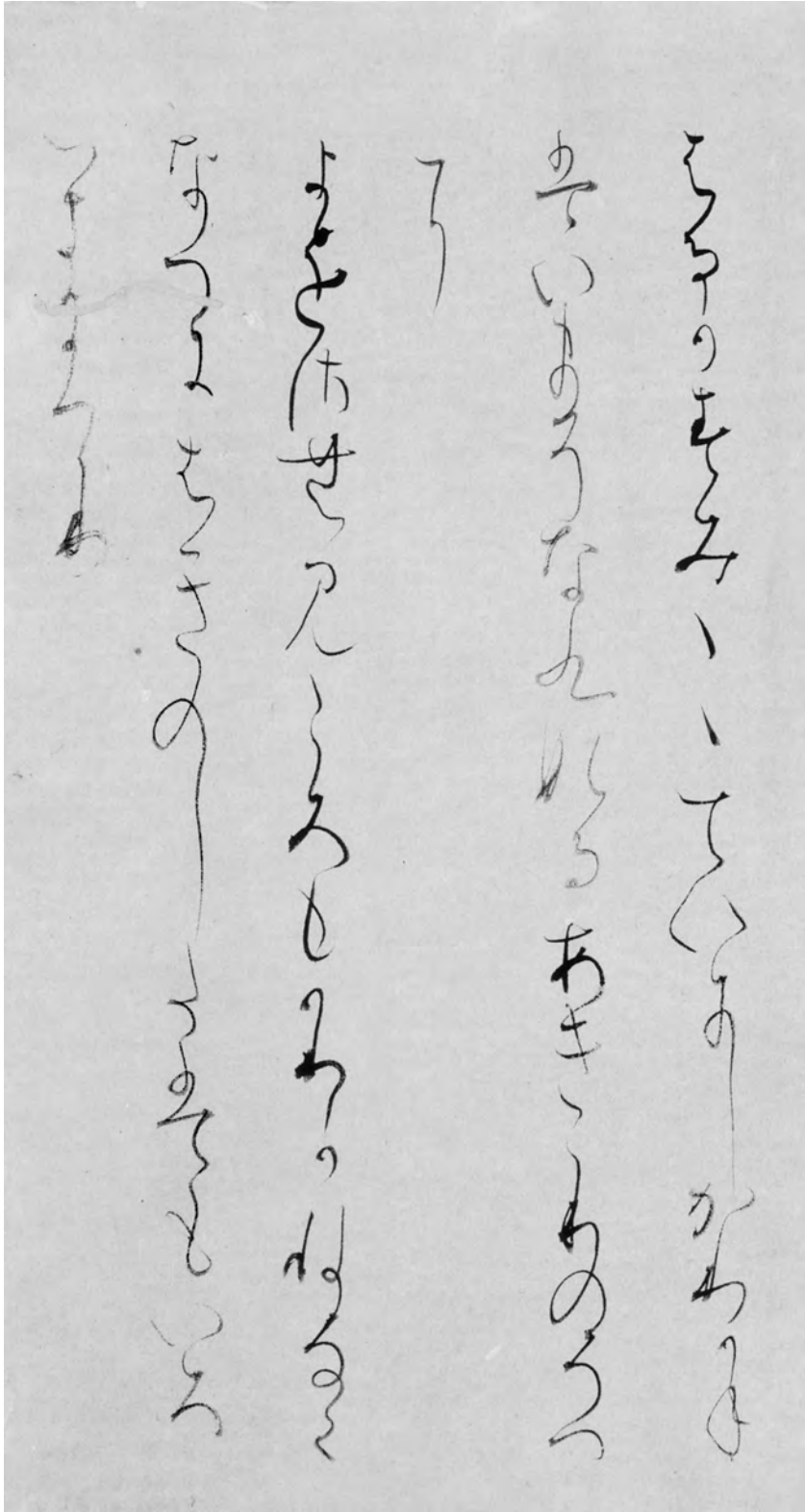
おおえ 大江のちさと／あしたづのひとりおくれでなくこゑ／はくものうへまできこえつがなむ

ふちはらのかちおむ／ひとしれずおもふころははるがすみ／たちでてきみがめにもみえなん



支^支き^那み^多なら^多で^可た^尔れ^可にか^美み^世せ^世む[、]む^能め^能の花^者／いろ^那をも^可か^可をも^可し^可る^可ひと^志ぞ^志し^志る^志友^友則^則

可^可いろ^可か^可を^可ば^可お^可も^可ひ^可も^可い^可れ^可ず^可む^可め^可のは^可な^可つ^可／ね^可なら^可ぬ^可よ^可によ^可そ^可へ^可て^可ぞ^可み^可る^可華^可山^可院^可御^可製^可



者
 はるが^可すみかすみ(く)ていに^尔しかり^利かねは^盤いま^曾ぞ^九なく^那なる^利あき^支ぎ^介りの^利うへ^耳に
 佐無見
 よをさむみころも^可かり^可かね^{奈久}なく^尔な^者べ^多には^盤ぎ^多の^多した^多ば^多も^多いろ^支づ^介きに^利けり

<原寸大>

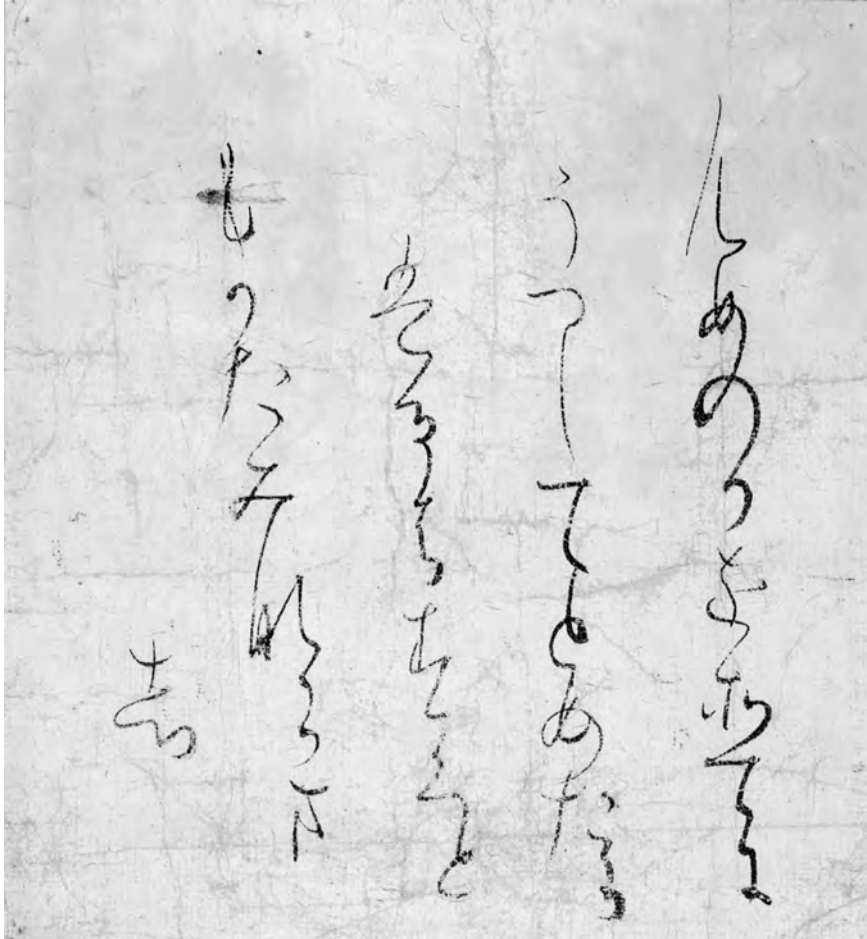
寸松庵色紙

かな部

第三種

半紙に枠をとり写真掲載の和歌を書く

△原寸大△



・料紙可

・たて12.5センチ×よこ11.5センチの枠を半紙に書いて、その中に書くこと。

・落款は枠外に書く。○○臨

・押印のみ不可。

・別紙を裁断して貼付してもよい。

むめのかをそで无可所尔に

うつしてとめたら

ぼ脱がはる者春はすぐと

もかたみなら可那万ま

し志

皇甫誕碑 (楷書)

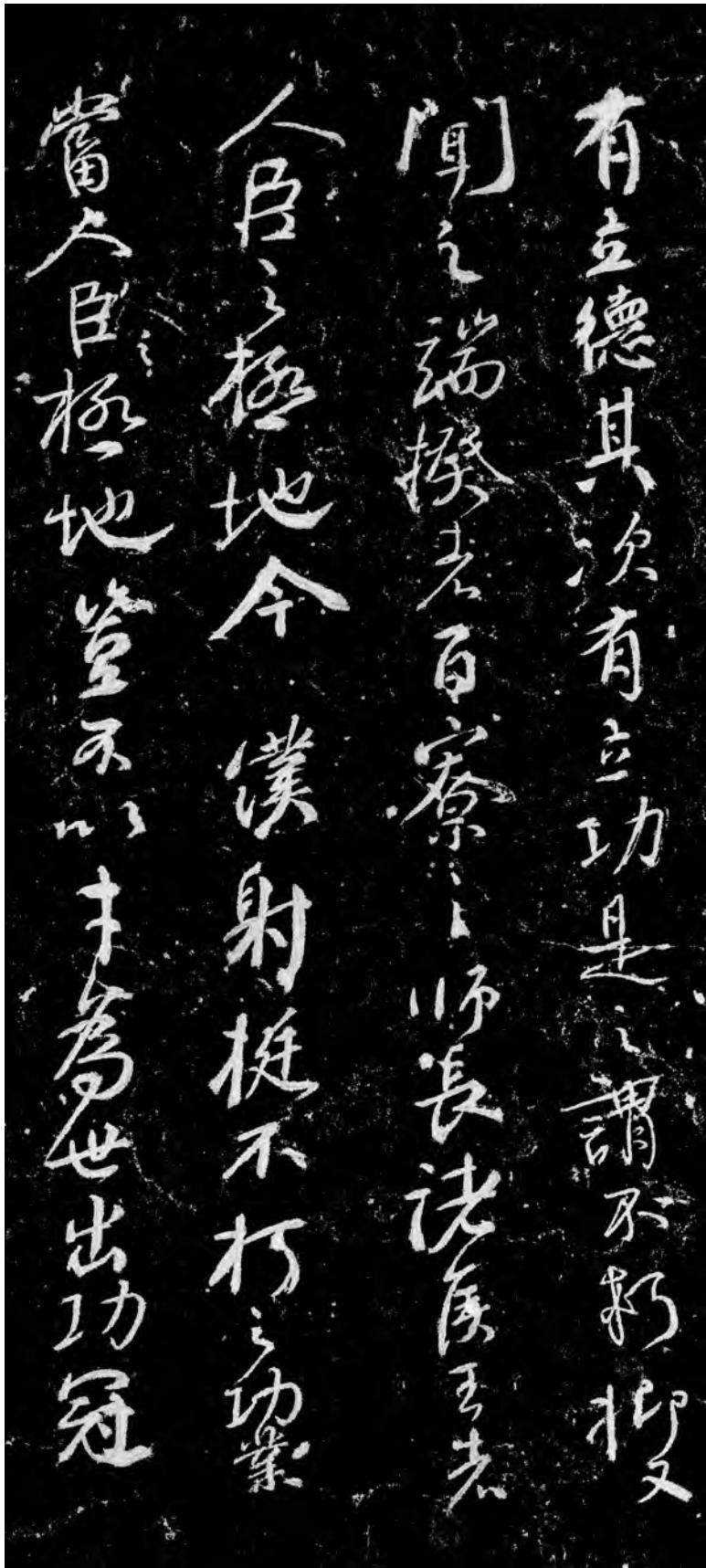
漢字条幅部

第二種

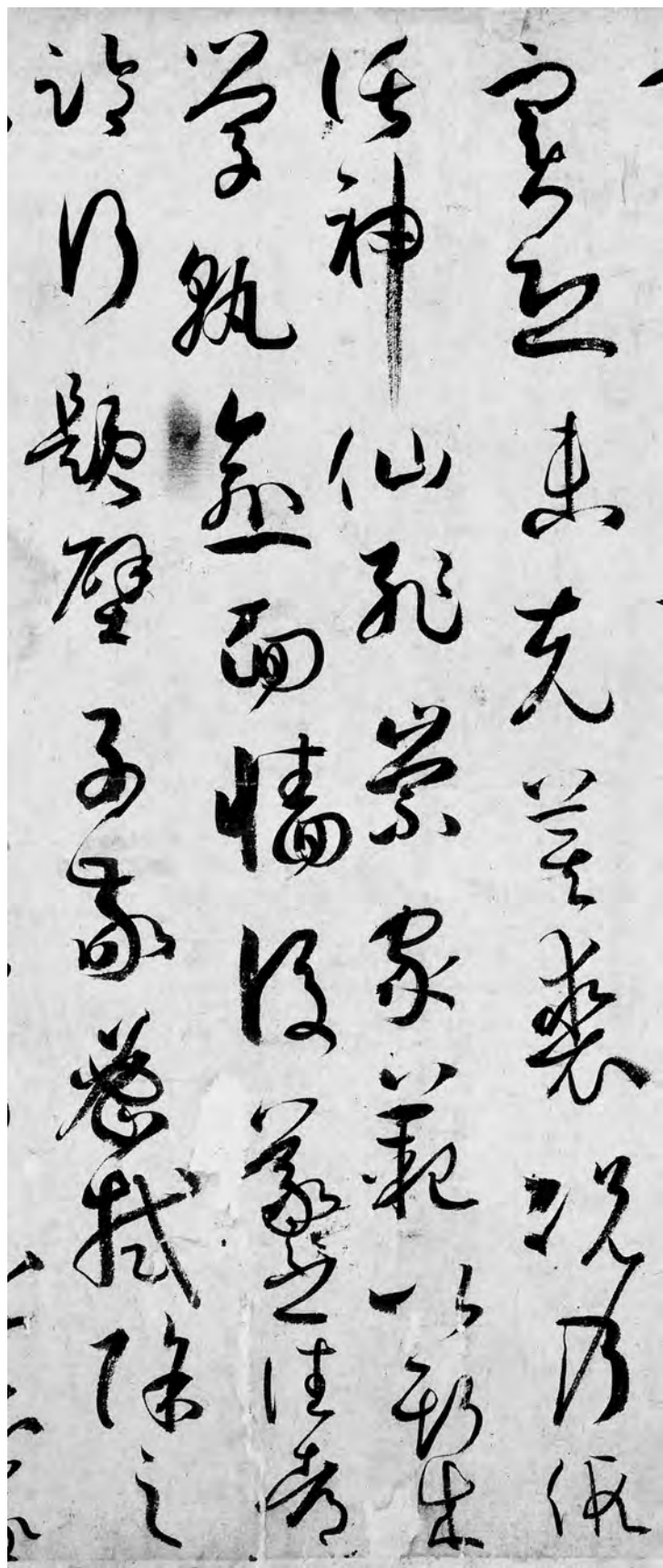
半切に写真掲載の中から14文字を臨書



顧。激清風於後葉。抗／名節於當時者。見之／弘義明公矣。君諱誕。



有立德。其次有立功。是之謂不朽。抑又聞之。端揆者百寮之師長。諸侯王者人臣之極地。今僕射挺不朽之功業。當人臣之極地。豈不以才為世出。功冠



實恐未克箕裘。况乃假託神仙。恥崇家範。以斯成學。孰愈面牆。後羲之往都。臨行題壁。子敬密拭除之。